

常山紀談

十五

函番號	上 / 號
種別	回
種番號	32126 號
月入號別	月 日

919.5  
338  
Vol.15



常山紀談卷之十五目次

一 伊勢國阿濃津城軍の事 附 佐治縫殿の事

一 長束大藏大輔降参の事

一 渡邊才兵衛武功の事

一 石田三成生捕の事

一 小幡助六郎忠死の事

一 河村権七郎の事

一 加藤清正の北北方大坂を忍び出の事

一 浅井昭合戦前田丹羽の将士功名の事 附 松平久兵衛軍の事

一 鍛煉の事

一 山田勘六郎討死の事

黒田如水凶相の馬に乗まじり事

黒田大友石垣原合戦の事

三宅喜藏武勇の事

肥後國守土城攻杉本次郎今夜討の事

福嶋家の士大将 東照宮を拜する事

加藤清正治亂を論ぜし事

黒田如水豪氣の事

常山紀談卷之十五

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○毛利秀元吉川廣家富田信吉阿濃津の城を以て時城兵  
 城の乾し隅に有る加藍を焼拂ふ不し俄に風が吹きて火  
 を城に吹かくる寄手是に乗じていざお破んとて実戸備  
 前守隆家先がけして攻入るを分部左京亮政壽城中  
 加勢有し切て出実戸と戦ひ互に痛手負り信高本  
 丸の大よみすみ出鎗を合せく相戦ふかゝる如く容顔美  
 しく武者緋おの物具中二段思草よておのりしを  
 著鎗を提来り富田が矢面よ立あせり支へ戦ひしり  
 中川清左衛門といふ者かゝる富田門に入る時かの武者を認めれば





治なりとて妻を迎へ近隣の老よそものよ土産し妻を  
心付し礼を述て池田の家よ仕やとて去り

○関ヶ原の軍敗ましりば長東大藏大輔正家江州水口の城よ  
引こりしを國清公船戸帶刀を使し降参を勧めし  
船戸是ハ抱なましり人怒るべしと辞しやれども汝とく  
行向へよと仰らるるバ船戸方三四寸計の小鉄の板を造  
らせやと返入る水口は長東よ降参あり巴士卒  
別の事いまり此旨よくせとたなりといふは長東阿濃津の  
城攻し関ヶ原よさせ軍おせく口懐くはさるバ此城を枕  
よせんとものおも存るまなり然るは降参せハ恥辱  
よそんといふぞ船戸長東がかえの士を懐く懐より鉄の板

取出し焼てまがりし三左衛尉が初今かきし偽あり印  
小鉄火をとり見せりさんとも切し体けりい  
つりなまざりし長東感してきとくもむくれて  
いふあ人もかなし汝があらざらむ死よしり  
降参せんすまは是ハ見苦しき物よゆんどまあり  
とく貞宗の脇指をとりあり船戸尚座を立ざりし  
うば長束小姓をよんぞ硯をわし降参さむきと  
船戸よあしりば船戸降るぬ長束城を出るまバ警  
固の兵を入らま

○佐和山の城をかきし堀尾信濃守通時渡邊喜兵衛を  
呼ぶ凡城を攻るは敵の虚实土地の要害具よ知らる

叶ふまじい少とて生捕をせむや汝事よくせんやと  
えまこれバ渡辺首を取ぶ易うとむまのりて生捕せん事  
叶ひぐとと中もたてぬよ渡辺が弟才兵衛進出殿の仰  
よ何とてさハの多ひらど喜兵衛年老より軍令を聞か  
ハ然るべしかろ力業ハオきぬよ仰付らまよといハ喜兵衛  
思慮なれ事なすを無禮なりといを通晴大志壮力人の  
及びぐと事をもなり得べき眼ざしよと才兵衛を称せ  
らまじりバ才兵衛座を立ちり兄の河ハ禮義なり汝が詞  
ハ血氣なりと人を戒めども吾思ふ子細あまじバも我  
しとて夜の更を待て従者一人お連ひそりに城際よ志のび  
ゆく茂るる葉の木れ下よさうやく者あり近くありてそ

まのざとと二人鎗とらむかろを才兵衛一人ハ突伏せ  
一人ハ追ちし首を従者よりせ城よ忍入く生くゆ  
事萬よ一ツなり此有様を兄よ信と云く堀よ添くは  
所よ夜おりするともむくして打る其跡よつりておけバ  
あり顧て名乗まてて弓よ箭をつぐよ才を場小声よ敵の  
忍び後より来るぞ爰は待くおんとつひつあもみより  
一丈計よなうらる時鎗を取のべく敵の弓弦を突切く其  
傍鎗を取直し諸膝たひで打伏せ上よ多あり汝よく聞  
よ吾殺さんよふハあしと志らくの子細有く忍び来り  
よ行あひと八天の多すけなり汝死んとならバ吾汝を刺  
殺して自害せんよまハ益なり吾よ随ひ来まよといハ彼士

怒イカりス既スに斯カク成チし上ノハ命イニチ生イキんと名ナをんやとく疾トク刺サシ殺コロ  
されよと云イ才サイ兵ヘイ衛エイ夢ムく二人ニヒトをカく死シんより生イキく功コウあ  
らんこそよふも軍イクサ神ガミも照セウ覽ランあれ吾ワレ偽イタナシなまきよと云イバさ  
らばいふもせよと云イ才サイ兵ヘイ衛エイ悦ヨクんで引ヒキ起オコし物モノ具グは付ツキする  
塵チリを打ウチ拂ハラひなまきバ彼カ士シあつて汝ナニハ大ダイ剛ゴウの人ヒトよて志シらうと  
弁ベン舌ゼツ明メイらなりかめられぬまじと恥ハとハ名ナは名ナハ松マツ田タ大  
人ヒトと云イ之ノめえといは才サイ兵ヘイ衛エイ松マツ田タを先サキよとて始ハジメ首ウデを取  
しる所トコロは行ユクバ從ユキ者モノも多オホシき衆ムラも追オウつぐいゝかめ歸カられ  
むとの才サイ兵ヘイ衛エイいふ志シのへるよや松マツ田タハ逃ニげべき人ヒトよあつて  
ども汝ナニ付ツキそひ居イよと云イ城シロの方カタよゆゝ不フよまはせお歸カ帰カ  
しるよ逢アヒ生イキ捕トルをカしてこそゆゝと云イ城シロ門カドハ固カタく閉トまり

兄弟ケイテイ打ウつて歸カりてかゝりて中ナカ通ツウ晴ハルゆゝ事コトも志シ  
しるよとて一同イツドウふとよみあへり生イ捕トルハいふよせんよと云イ  
東照トウショウ宮ミヤ心ココロよ任マカせよと仰オホあり才サイ兵ヘイ衛エイ松マツ田タよ中ナカせし詞コト志シの  
なり松マツ田タハ腹ハラまきせられバ臣シン先マキ死シ罪ツミよなりゆべしと云イ  
ぞ勇ユウ有アリ又マタなまきけ有アリとて松マツ田タもゆるさまきしる  
○田タ中ナカ兵ヘイ部ブ大ダイ輔ソ吉キチ政セイ石シタ田タを生イ捕トルよせしまじかといと懇コン子シ會エ  
釈シヤクして教シヤウ十ジュウ萬マンの軍イクサ兵ヘイをひきあらしむ事コト智チ謀ボウの也ナリ  
きりよと云イは軍イクサの勝シヨウ敗ハイハ天テンの命メイよゆゝバ力チカラよ及キび  
と禮レイ義ギ正テイしるりよと云イハ三サン成セイ打ウつし  
三成サンセイ此時キジ坐ザ上ジョウの楹ヒシラよよりかゝりゆゝ事コト田タ兵ヘイと云イ  
か如カく此時キジも田タ兵ヘイと云イ常ツネ不フ替カらざるしと云イ



秀頼公の御為に害を除き太閤の恩に報い奉るんとせむ  
し小運尽かくまうし事何をも悔むべき是ハ太閤より賜ハ  
ア切又正宗の脇侍もあうかきふふあうすよとて歎  
けり

馳走の士を付くりてあしつゝも片時も早く死ん  
とく食せば馳走の士いふで兵部がたうしひよ及ぶべき  
よくつゝとく最後御用意いふといひくまを  
さうバ此頃腹中の何もまは糞糞水をききまへと云へ  
其設してすめくまは快く食して打伏し軒かま  
しり

田中石田を引具して大津よりあうまは 東照宮本多

正純は石田を守護とせきよし仰せられまは正純石田小向  
ひく秀頼公年若く事の是非を志しめまは唯太平を致  
ま道も有べきまはあう軍あうてかく恥辱も及ま  
しぞうしと云へお三成吾土民より國を賜ひける恩を  
へんやうな一世のまはをえまは徳川殿を打亡まは終  
豊臣家のしめあうしとせむし秀家景勝を始とせ  
同心なうししを志しひく勸えまは遂に此軍をバ起しり  
ま戦ひま臨んで二心ある輩裏切せしを勝べた軍は打まけ  
ぬるこそ口惜まは二心ある人ごふなうバ汝らもを始めか  
くれぬかか免あんと志を失ひまは運盡ぬまは九郎  
判官も衣川もて空しくなりしとき吾打まけハ天命

とらふ正純マサタカ智将チショウハ人情ニヒコを討ウチて時勢ジセイを知シりて諸将シヨウショウの同心ドウシンせざるも知チどかろづくも軍イクサを起オコさるるものな  
軍敗イクサマシましく自害ジガイもせでかめらるるハいふとらふは三成念ニカウ  
く汝ナニハ武畧ブリヤクハ亦ウエも知チざりき腹切ハラキツく人手ヒトデふかからずすハ  
葉武者ハムシヤの事コトハ頼朝ヨリトモ公キミ土肥ドヒの杉山スギヤマく朽木クナキの洞ホラハ身ミをひき  
めし心ココロハトのも知らず大庭オホバはかめらるるハ汝ナニハ朝アサらるるべ  
大将ダイシヤクの道ミチハかざるも汝ナニハ耳ミミハ入イらるる今イマハ是コノまでなりとて  
物モノもゆるば

東照宮トウショウミヤの御前ゴゼンへ三成サンセイを召シ知チては武将ブシヤクもかざる事  
むらより有アきありなり恥チはあはれと仰オホセらるるハ三成  
うきま打ウチとげく唯タテ天運テンウンの志シくもむる如ゴトもゆるく

首カビをさるるもらるるもくもく東照宮トウショウミヤ三成サンセイハはるる大將ダイシヤクの  
器量キリヤウかろくも平宗盛ヘイソウノリノハ大オホニ異コトなりと仰オホセ有アるも  
いへり又一説オモトゴト中納言ナカノリヤク秀詮ヒデアキ石田イシダハ体タテをんむやとて座サを立タれ  
しハ細川ホソカハ忠興チユキ何ナニでも益ユキあり事コトありといへども少入シヨウハ三成  
秀詮ヒデアキをんむく日ヒ汝ナニハ二心ニシンあるを知チざりてハ愚オホカなりとさ  
ども約ヤクまたぐひ義ギをさるる人を欺オソさく裏切ウラギくは  
武將ブシヤクの恥辱チジツ末スエ世セもても語カタと傳ワタへく笑ワラあべいと云ヒくも  
秀詮ヒデアキ初ハジメなりと又マタ三成サンセイ大津オホツツといへり時御本陣トキミホンジンの門外モンガイ  
小畳コタタミをさるる其上カミに坐マりて諸將シヨウショウおるるも福徳フクトク正  
則マサナリ無益ムギヤクの乱ランを起オコして其有アる事コトといへり石田イシダハ  
まを生イどろく縛シバらるるハ天運テンウンなりと云ヒくも正則マサナリ初ハジメ

かくくさるる事及黒田長政通らるる馬より下りて不幸よ  
てかくありまひぬ是をこそ思ふ事羽折をぬいで思せし  
さうりといふ

石田を始免小西安國寺生とて三人の肌は木綿のやま  
しるの事を思ふ事東照宮より召石田ハ日本の政務を取  
る者なり小西も宇土の城主なり安國寺まかりしに  
者よのうして軍敗さくられ置さまた安とあるも大将の盛  
衰ハ古今珍しく命をみどり又棄ざるハ将比也す  
和漢其さめ多し更恥辱はあはれ其ま京中をこぼ  
ちば將たる者よ恥をあはれ事吾恥あるべし仰有て三人  
よ小袖を賜はるり石田はえすればははるあはれ

問ふ江戸の上様よりといへばは雑事ごとく徳川殿と  
答ふは三成何徳川殿を尊ぶべきと一言の禮は及びあ  
は笑ひて居るり

小西ハ敵對の吾ふこれまでのいさやう心よ恥とありと  
涙を流るる事安國寺ハかくいさを赤面一俯居

あたるも三成を誅す耐車は載る六条河原はあは  
石田顔色平生の如くなりしや又石田治経が天下を取

しと云く事を思ふ事お笑ひひき大軍を率ゐ天下は  
目の軍一たる事天地やあはれさる間ハかくれあはれ

とも心よさる事あはれさる事あはれさる事あはれ

さる事

○小幡助六郎信世ハ上野ノ信繁ガ三男ヨク上野ノ人ナリ千  
五歳ヨク大坂ニ赴キ諸家ノ体ヲ守ル石田ハ太閤無二ノ  
電臣ナリバ仕ヘリ後祿二千石ヲ受ク関ヶ原ニ三成  
敗北ノ時ハ一隔ラシ三成ニ從リ後々之ヲ切ぬケク三成ガ  
行方ヲ尋ヒ江州石山ニ来リ郷民カメテ大津ニ  
出サシ百姓ヲ賞セシメテ金二十枚ヲ賜テ信世ヲ召  
出サシ石田ガ行ヘテトクセヨ信世兼テ三成ガ士小幡助六  
トヤ老ヨク主ノ在所ヨク知ル然レモ年比恩ヲ情  
シ身ノ今日此難ヲのグモ主ノ在所ヲ以テ不義ヤム  
キ骨ヲヒリテカクヤマシテ試小幡助  
切テケリ 東照宮ヨリ召忠義ノ士ナリ三成

○行方ヲ知ルマアハ志ヲ立テテ落行ケル  
めラシレ士々ノ志ヲ携向ニ及ビテ持テ人ハ忠臣  
義士ニ不便ヲ加ヘテ仰有テ則救セシ  
ヒケリ信世近ニありノ寺ニ從テ申シ語テ  
ガ外ニ救ヲ蒙リテ亦恥ニあもんも討テテ死  
カクシテ自害シテ大津ノ上ニテバ此ノ外ニ  
ケシセシ

○関ヶ原ノ乱ニ時カ藤嘉明ノ少将大坂ニ在リ河村權七  
郎ヲ伊豫ノ松前ヨリ大坂ニヤリテ忍ビテ屋敷ニ在リ  
北ノ方に相見え松前ヨリ長臣等ガカケリテ奪ハ  
取んとせんも臣カクテ危クを思ヒ召シテ

しとく屋敷の隅に井楼をのけ柵の木をひ敵はむらるが如くか  
かゝるぬ時ハ自害をすめ臣も御供やなると云々ふ細川忠興  
の山北方自害の後人質を奪ひ取事止らるる河村は二百石の  
禄を増興へらまらふ後河村いひけるハ大坂川口のちり固く中へ  
通るべき程を尾ヶ崎の漢夫をかこひ船は糸網の中へ  
身をひそめ敵の中へ入るちりハ必死を思ひ定めしむる  
関ヶ原の軍は首取らる老は同ドクハ然るは恩賞の爲なる  
明らるるぬ殿なりとて出奔しければ嘉明念く探出し  
誅せむやとまらるる山中かく居る大坂の乱起  
りし時嘉明江戸は残りしとめられ不慮の事ありて取られたる  
攻殺んといひあへり其比夜更く河村嘉明の屋敷の門をたき

青木佐右衛門を呼出し青木あやしく立出くんと河村なり  
こゝともいうある事ぞといふ河村事ありしとやうな事ども  
君は仕ふる者の忠を致さハ常の習ひなり然るふるふ大坂  
の事ふちりて殿を嘲りて出奔しける事後悔今さら益なし  
十餘年山中かく居る志らるるの事ゆく殿も危くおぼし  
ゆはとやうく夜を日小継くありしとといふ青木誠は義理の  
志ハさる事なれども殿めいり甚しき事ハかく中へも  
ゆるさるる歸らるるといふ河村臣は者の義を知り  
なれば河村ハなれ来らるるやといふる門内みぎに入候とく  
歸まるとハ口をの詞は此ハ町屋かく居る殿の先途を見  
んと云うる青木さるる先でんしく内へ入嘉明は告まら

くまよび入よしくやぐて寢所は召出され一が目入るより涙  
を流さるる河村も涙もむせび君臣志はるも頼もなかりしが河  
村おのひもよび殿の御前よ出る事よ今生のよひゆふも  
嘉明汝が志いんやうもなりと悦まき夜明て河村を連れ  
し下船までいひとや大軍の援有がめくいさみたり  
寵愛して八十石あるらまら程なく病死し奥州  
四十萬石よなまら時河村なごらんよ八國政の輔佐  
らんよなげくれしとや

○加藤清正の北北方も大坂よなを石田人志らよとよと云  
をびしバ清正より付らまら竹田善兵衛家正大木土佐恒持  
謀を思し轉法口よ居る清正の舟奉新梶原助兵衛よ山梶子

の羹汁を飲せ四夜移りせだ疲またら大病人の  
なりしをなまのせ綿帽子かかせ前後よ余かき門番の  
前よ戸をひり断り屋敷よやく事なまら及ぶ後ハ見  
なまらふ小窓めど又川口よハ蜈蚣船を晚ごゆまら  
べをせせたり是も番船見たまら後ハ早もハ早た  
なまら守かきぬかき清正より吾ハ石田よ興す  
まらなりしつ小もして小の方を敵よこしに  
かき云来アまら大木よまら事よハあり小の方に  
此由を告ぐ梶原が衾の下よ小れ方をかき其上より  
まらまら毎のまらかき戸をひり門番のまら通  
土佐もゆり供し若見登あらまら小の方を刺殺一切



敵一筋の一筋射懸て居る者やんば明日れ  
軍陣をこぼしてはなご敵を恐まぬ燈ハあす人々知ら  
せんものごと云り其夜物主皆張番を出入山崎打巡り見  
て久き傷が足輕ハ何あ味方近く置しやとり久き傷あ  
けに勝敗の理をたゞ敵を侮り勇まをとりく利害よく  
たゆれ士を下知する事こそうそとれといハ山崎ゆつて敵を恐  
まてくちちしつるなんと罵るをわんよりせんるたあ  
こひめし留めたり久き傷いよく憤て強敵をあつて目を  
驚うごんおをこぼひ定めく居りりり

其夜長重ハ士大将を集め江口三郎左衛門を大将として夜がけ  
せんともうりし小俄ハ大雨よく風烈しく夜討を止られし

江口風雨ハ夜討は好む事ありといふ人々皆たしりり  
よとをまじや御幸塚の左右沼よく人馬のかけり心よま  
うせ明日敵討取る時追結くをひれまは討勝べいと云  
まうり

長重の士大将江口三郎左衛門正良惣がまへより見渡せば敵  
段々引退く時こそよめまこと兵をせりお敵を食魚ん  
と鉄炮を打かくる長重もやがて兵をすめらぬ

又一統長重鉄炮のさをもつ後まを考どもとて馬は鑑を  
合せしを付らまうり江口あり願く今ハ初めぬ此殿  
の早もて裁と悦びたり長重これ浅井山を取り敵の頭  
上より打かくるめたは盾をつらする事あつと云



エムチモイモレバ  
江口尤然るべしとくあしよりつたさる兵三百人を以  
具し浅井山よのぼり敵を目の下よ見下し鉄炮を打  
つげくまば坂井与右衛門直吉も馳来る長重いふく競ひか  
りし一息も前よすめ一寸も退くべしと下知せられ  
りて金沢の軍をさるるた終夜の雨よかりの陣屋もみ  
たれば物具皆濡とほり鉄炮は銃口よ水入り火繩もふり  
けささく尤右の泥あり多くふさいとて松のたてをなげ  
入も足ぎらぬりとせしとりり  
金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣をめぐるととく江口庵を取  
かきと下知すまば松村孫三郎馬を乗出し敵の陣れ中を  
走り切り荒田五兵衛つづいてくるを入る

松村ハ五ヶ所痛手負ひ馬より落々を小池新ヶ場松村を  
馬よのせ引取せしとあり

長父子あし止りこを専途と戦ひくるに流るる者多し長  
好連こし十八歳多れ老にちかむ討せ敵の中よかけ入り討死  
せんを横田久右衛門馬の口よを付引返して長重の軍勝  
よあしはしと追詰り太田但馬ハ殿の陣よ軍ありし兵  
を召し馳来る水越縫殿山城橋よのり鎗を提敵小向  
松平久兵衛ハ太田が陣よ足輕を下知して居し銀  
飾し曹を召し思た物具も馬を召し馬を乗し  
水越が前よつと進ち小松の士拜郷治大夫と鎗を合せし  
水越もつづいて安孫子作大夫と鎗を合せし



引取敵より少くも追返されしを以て武勇  
の働ハさる事なきも感状ハあつるに及びばといふ  
クア

○利長乃兵六山田勘六郎八十四才も父の仇を討つ人ありある  
日利長孝隆の戸を閉くとして山田は鎧をあげけらまひしゆを  
急だ来まてと叫ぶしよおきりなきハ急ぐ持てる杖を突き  
しふと思ふふ額の中へく血流る跪く平伏せし脇差の  
鞘をさしきりしむすしやとてきらみうげく杖をく  
打んとせられしをかきより山田を引のけし山田此より病と  
称して引のり居ししは関ヶ原の乱起りし利長大聖寺の  
城を攻る時一段高た所は打より武者おしを見揚せし山田五六

十人計し具しつを寂期とせしちくが通り城ははくと先  
かげして一番は乗込鎗よく乳の下を突くとわされ痛もなれば  
堞の下はあつるかめく從者よいひあつめしうば息絶する内は  
利長の前より昇来り利長はく後悔せし事甚しく其あや  
まらざるを懇よこころりく涙を流さる山田やがて死入り行年  
廿歳世よすまこる美男なりしが大剛のちく死して討  
死しつて其前口をくしき朋友よ奇南香をとりもち贈るを  
其頃大聖寺にやらしむくめてを申しつりといひり  
○黒田孝隆入道如水関ヶ原亂の時九列を打平げらまひしゆを  
し馬ハ二寸計の思き馬あるが百會よ手負といふ旋毛有り如水  
此馬を指さしてとまき此凶相を志しざらよあつたれども人ハ

萬物の靈なりと聞たり人よ勝へき萬物なり一吾不道を六  
凶相是より大なるハなり一此馬の毛きたよかハハと云々  
○関ヶ原乱の時大友義統木付此城を攻るとやうく如水後卷せり

士大將久野治右衛門歳ころころとて曾我部五左衛門を誘はれり  
敵四五千討立石の民家を後よあて待りけり久野遙ふんて

金の天衝のさし物は一栗毛ある馬よ争ひかれと下知しり  
を曾我部今志とて待りてやうく勝利ゆまどあり立て馬よ

息つがせ一同よりころころと後よ味方のはぐくハ時衝かり  
一戦せしむるといへど入む久野が後者荒巻軍兵とありあ若

豊前前の地士なりしが若た時宮松といひく十五歳あり功名  
せし剛の者五右衛門が何尤なり馬よあて倒し蹴ちりはとハ

敵よよよりこの敵ハ國替の時よくありし若くは皆揃  
なり近年落ぶるとして此乱を死せよき時節くこい定め鎧を

膝の上よおたきつよりあつる取ハ一騎二騎むくくとかげ合  
せんよいうで勝べきや鎧をつれ折やどの軍なりでハ叶ふへら

らばとて馬より飛下り久野が馬の口よえ付ころころあがり  
後陣のをやりやうよとて後陣は先をころすればこそ取なり

免後よか結ん時よ懸てつき崩さべりと云々ふ平田彦右  
あつていありの馬よ争ひなぐりやうく後陣をまうんとせば井

上野村すくも男あれば必先を争ふべり大友が若くも木付  
よく疲まこ又爰よ来ころころすくもといひくもバ荒巻怒

十五十八

て平田汝と共々其の者あるが度々もなるとハ知るよ今  
井の邊に軍は汝を追うげく具足タソクの押付切オミツケりて疵キズハ有べ  
其後四兵衛治右衛門汝を呼出ヨボイダして向ムカまりし時汝がけあげさ  
小討コウチとめざりたといひつゝもな禄ロクを得エてはばつが蔭カゲく悦ヨクび  
ハ志シまじつゝといひすて馬ウマは先イサキがけすれば二十騎計ヒトガ  
度ヒびつゝをわいつめくかりつゝ敵ミテ三手ミテ又ワカかまてつゝを一陣  
を突崩ツキツムさ久野ヒサノを奪ウバりつゝ者モノなまじバ少スコミもせめらば一文字小  
兼イリコミ込戦イリコミひくもつゝ大友オホトモが兵ヒども度々タビタビの事コトなまじ今度コノトキの乱ミヤ  
まじ故主コノミウの招イホきつゝ従ミタひつゝを限カりて芝居シバよひつゝ折マりま待マ  
かけきれば久野ヒサノ主ヌシ從イッショ五騎イツゴ一所イツショあつて討ウチまじつゝ曾我部ソノガミハ久野ヒサノが  
討ウチまじつゝ亦モ横ヨコあひよむけ入イり討ウチ死シまて平田ヒラタハ久野ヒサノが討ウチまじつゝ

て馬を引返して引退きぬ荒芝ハ敵殺キヤシひ掛カるを思オモひつゝ引  
んとく人数ニジンを集ツむ敵トク嚴ビシしく進イむを見て首クビをバ皆捨チさせ  
馬ウマは輪ワを廻カく引ヒきつゝ後殿シノガして引退ヒきつゝ久野ヒサノが討ウチ死シを  
知ラざりて其ノ日ヒの功名コウキヤウいづつと成ナりつゝ黒田クロタの二陣ニジンの士大  
將シノウ井上九郎右衛門モトノチ元房ノムラ後ノ周シラ野村市右衛門ノムラ後ノ車クルマ人ヒト遙ハく跡アトめて関セキの  
形カタを窺ヒき此山コノヤマより上ノりて敵トクの軍イクサ上ノりを見ミ指サくべしと井上シノウの兵  
は下知シ進スむ仍ノムラ村ラ先シ軍イクサ有ルハ分明フシムカなり何見ナニミこゝの事コトの  
多オホきといつて井上シノウが陣ジンおろしめく通ホさざれば今イマ少オホ先サキ  
押オシせられよ廣ヒロき所トコロと陣ジンせんといつても陣ジン入イられバ獨言ヒトコトして  
怒イりつゝ亦モ井上シノウ主ヌシ從イッショ三騎サンゴ小山コヤマは事コトあはげさし物をぬい  
味方ミカタをまじつゝ陣ジンをすめたり

井上唐冠の曹鳥毛此棒のけしおしりといふり又佩楯を  
取く捨くまじバ井上が手此者まらやまげーき軍よといは  
めりしなり

井上野村敵ハ皆かちどちなり馬のかけ場をたのむも必死  
の敵はかるくくかりぐりぐりといふく皆馬よりかり立勝よ  
多あさ敵ゆく殊よ譜代重恩の士ども多あを限と思ひ定め  
しるあまじバ敵かきも相がかりまじりて待軍して突  
崩ししりとも足を乱して追べくくばと下知しあづくと  
ぢりうは大友が兵是をたてまはらけせは忽突あきん  
とあひしはさきさひり野村ハ朝鮮よく漢南の軍よ功也  
膝よも肩行歩心よ任せざれば片ものよてんぢり馬よ

多あといひて下知しあり石垣系ハ原の中よ高リ一丈餘乃  
石垣主手六七町討もつて死てかり井上野村おれ石垣こま  
しよ取バ軍よ勝べしと進もくまじバ敵も回く進んで石垣を  
踰んとせしをつき敵ししよも北るを追きて井上鎗を抜  
へ押ししめ野村ハ馬を乗せし兵を整へしり大友の士大将吉  
弘加兵衛宗像掃部是を見くかくてハ味方まけ軍あつた  
敵勝よ多あく足を乱さんあを追立んと多あひしよ力なりと  
ても討死せんと思ひ定めしればいざからんとそ二千討多づ  
しよあみよる井上野村是を見くくしりもヤリて折あき  
相がかりあもせし待軍しり間近く詰あて散く小突合答  
く大友勢一町行引退きまじりも追もからばりしめ芝



ハ細川忠興は仕へるが父のまじしを忍んとして別府より  
其印の石を拜せし多く米を供ふるより鳥の集まり  
糞ふくまじし今より武具をそまへて治し  
さななくハ治しはざれといひしが是より米を供ふる  
しかり木刀を作て供ふるありといへり  
宗像も井上が従者大野勘右衛門と引組して勘右衛門が弟  
休也といひ法師武者走り掃部が脇腹は刃を突立てい  
やとちのりりれば遂はそこへ討まわり大友の勢突崩  
さまさハさし又おかり戦ひも井上野村追うけ  
むりりの芝居は跪き又かまは立向がり突のけ幾度といふ  
事を志す大友が勢終小打負く残さなく討まじりハ僅計

小かりく立石は引取義統力尽く如水は降参せられ  
○義統木付の城は向ふ時細川忠興の士大将松井有吉加藤清正  
は加勢を乞うれば三宅喜藏をゆるぎ三宅殿の先陣  
ゆき功名せんと思ひし他國は往く城はかきりしん  
ハ存もあさき事なりといふ清正汝が武功あるを他國につ  
るしんとも吾名を汚さしと思ひあさき小巳が名を食ふ  
そ心得永く我家を去く心まらせよといひしんは  
三宅そををゆく庄林隼人よかくと告殿の外口を蒙アそれど  
殿なりで奉公せんと思ふ大將もいひあさき隠し金給  
いんやといひしハ隼人心得しんと許しんと清正守土の城を  
攻る時三宅ハあさきの三本あさきの差物さし夜半より塩田口の



堤より行く明るをまの川宇土よは南條元琢こりり居り此元  
琢ハ伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次子二男少く兄の元重は  
劣らぬ大剛の者あるが毛利元就と軍さる事度をも及らぬ  
敵さるるぞて只一騎馬上より上帯をめてかけわし半里を  
後軍兵ども追つゆく速に國境に池に押寄る軍兵を追散  
しる勇士なるが秀吉の勘氣あつく小西行長が許しかつて  
朝鮮でも武勇に振廻せしなり此度清正あるも只一騎  
城を乗出し元琢が従者福西九郎大夫是も十八の時より輕便の  
軍よあひく物所あるが元琢はくまじくと城を出く池に  
山の上小清正の馬藺の馬印ひくめたつく見えくまじくバ跡進んで  
三宅より合え琢馬より下りて三宅と鎗を合せくを福

西透向なく走りより三宅を斬る三宅がつまきく鎗を元琢握  
りてはひよ引奪ひく既危りく三宅の従者元琢が曹  
の真向を一刀斬付しり元琢目眩きくくわくわくあぐり刀を  
抜て三宅が従者を切倒し清正甚の二本をあらへハ三宅喜藏  
あつん討てを考もと下知せしり討の下より飯田角を擡  
莊林隼人馬よりわしを合せくかけ来りりれバ元琢敵つる  
なばあしりあんと三宅をすく引とて清正三宅を喰し其  
日被らまし羽織は千石の禄を添くあしり

又三宅元琢が曹をつき落せしり頼よくあつても浅手  
るまじバ三宅が鎗を取付しれども三宅鎗をすく組合しり

ともいへり

其後関ヶ原の軍破ヲまキく行長生捕マたりは清正使ヲを城ノに  
立城ヲを明クくと云ハまシくは城代小西隼人自害シて城中ノの者  
とも助けシめりんやと申シて清正許諾シて八代の城代小西若狭  
も自害シて守土八代を清正に授ケく清正南條ニ六千石の禄ヲ取  
興ヘらシたり三宅と南條と物ノのツりトに元孫汝ヲを討留シ  
せしと残多シとたシまシく三宅我レもさシ存スとシひハ  
るハ我レ

三宅守土ヲまキく組シる時忽刺殺シまシる其日指シる小脇指  
少シ長クりシと云ハり

○清正守土を圍む所ある夜敵夜討シまシくはなシる下  
知せしとシり果シて杉本次郎ヲを大將トして清正の陣ニ

夜討シて日下坂平ノ坂川忠キ場鎗ヲを合セる攻戦シ杉本守  
固カきをシて城中ノ小引返シて田中兵助ハ酒ニ酔ヒてシり  
鉄炮ノ音ヲ發シて起リあグり鎗ヲを取リてかけ知リに敵ヲ取リ門  
内ニ入リ杉本一人大手ノ柵ノ木戸口ニ残リ止リり田中内ヲ  
かけしバ杉本十文字ノ鎗ヲあシく田中を一鎗トたシく柵ノ中  
小入リり清正火ヲを燈シ一軍ヲせシ老シをシて小田中今  
夜先ガけしテ清正能見ル一番ハ日下坂坂川二人ノ内ニ  
二人トも前創ヲ弓ハ鎗ヲを合シる射シて一同ニかシる射シ  
まシものたリ田中が創ハ右ノの腕ニ射シり鎗創ヲあシるバ尤ノも小有ル  
るハ横ニ疵メあリハ汝ガ自ラ切リと云ハりバ  
田中敵ハ銀ノのたリる立物打ツる曹ヲをシ十文字ノ鎗ヲを

杉本次郎少と名乗しつた杉偽と名召りし人ハ不幸の至り  
よんとて退きつて後城明りつて杉本も清西よ奉公しつた  
此夜討の事を問まらふ杉本城よ入んとせし時どつたの曹  
を忌鎗を提て走り来りし武者を一鎗つりしんとて清  
正田中が河證據よ符合しつた五百石の禄をあつた田中  
其夜一通の書をゆへ虚名を蒙り世の讒よあひらけし加禄よ  
本の禄を添くみしんとて肥後を立退り田中ハ其初盗賊小  
て有りしが石川五右衛門といへる強盗の長を秀吉の時京の三  
條河原よて刑罪せしめし道く見物の男女群をちり田中  
其中よ紛まて石川を引くる時よつと飛あがり石川が縄  
取を唯一刀よ斬倒し五右衛門日比の思よ報しんと呼りし

つたひりめく間よ人の中よ走り入終り逃出する男なり此  
時二十六歳とや

○関ヶ原の軍よ功有る諸将の家臣を召し東照宮御盃を  
下されし時福嶋正則の士大将福嶋丹波ハ跛尾剣石見ハ瞎あり  
長尾隼人ハ聾なりしは近習の人々能もかきしもの集りし  
とてやれたるを聞し召汝等年若くとも能あけ女ハ容儀を  
するありよよ形ハいふもせよかゝる軍よ功名しつたを男  
とハせしむぞかし彼三人ハ世よ勝まて大剛の老あり汝等  
志士二三を彼老よ似せしハトありしんとて仰らるる致  
○関ヶ原の後東照宮石田が乱ハ雨ふりく地りよあるとつた  
回し此より静謐あくと仰有しし就大名皆祝しなりし

小加藤清正仰の如く悪逆の輩誅せしめ恭平しく人事必  
然ゼンまの徳もども天下に治乱ハ天に陰晴よしくんひらんよ  
ハ晴渡ハレワタアア晴天ヘイテンとくも俄ヒナカよ雲の出来て雨アメうはまがめき  
事コトもるわのまんへバ測カクざらハ人此心よてふとやされまば  
浅アサく御感ミカニありアとなり

但清正の此論コノロンの所もて此事なりコトや詳ツギあり

○関ヶ原の時黒田如水ハ豊前中津より九千餘の兵を率  
る九月九日打出く諸所の城とも攻落し筑前筑後の浪人た  
相集り大軍よ加し討嫡子長政此使来り関ヶ原まで石田と  
とめ敗北し金吾中納言秀詮ハ長政の謀よんく裏切  
せしきし由告ツグらるアば如水大よ怒りうつけ果ハる

甲斐守より天下各々の軍ハ口をきと月日をもり浪人此  
すだをひをあるもの何事の忠義ぶとぞ日本一のう  
つけハ甲斐守なりとぞはづやくも其後長政は筑前を賜  
りりりまきバ如水も京よ上らまきア諸國の大名如水の門よ  
来りく市をありりり山名禪高如水と年比の友なりりり  
如水の許よ来りり諸將の尊崇大方ありり殊よ夜中よ密  
談もゆとて世の疑ふものなり就中三河守御親の如く  
敬ウヤももんかア徳川殿怪アヤしアワカアなり徳川殿遠き  
慮オモある人なまきバこあア心安く立入人の中アあもいア目  
附ツケをり設けらるア筑前守の武畧徳川殿の賞息浅く  
むらよ斯カクてハ筑前守の為よ悪アうりア徳川殿志ア小用心

あるも皆如水を恐まことの事なりと人もやんば又醍醐山科  
宇治は浪人あまゝ居らも如水の隠しをさしと人々驚ひ  
ありいふふとやされりも如水もあんに内府を攻亡一天  
下を取んと思ひんはハいと易き事なり筑紫をバ皆打平け  
しり鳴津のそ残さしつるあつらひをさし味方とせん若楯  
つら攻敗らん幸尤易き事なり中國備前播磨まで皆空ふ  
よそ有らば我其項二万餘の軍兵をひきか加藤鍋嶋ハ既  
我は随従はまバ兩先陣とて海陸二手は分ち道すぐら  
浪人どもをかり集んは十萬ハあるべし清兵ハ極将なり五口旗  
本は有く攻のなる程もバ内府を討滅んるの掌の中は有と  
竟るもさしどもは年老ぬ切従へし國を捨る京ふしは

臆病者どものきりけりくわくの事小恐まことの事を  
誠し心得らまはるやとて扇をぬいそ疊を打く大言せし  
まうらば禪高やかくの朝なるとて歸らまはる

備前 湯淺新兵衛元禎 編輯

同藩 平野太郎左衛門敬邁 赤木益吉周憲 校訂

弘化四年丁未七月

發行書林

京都 勝村治右衛門 大坂 秋田屋太右衛門 江戸 須原屋茂兵衛

# 病家須知

擇善居士人著

此書初小養生の要務を説き一切の病小薬を用ひて唯常の心裁を治せし事を示し医者いしやの駈引かひん者病の心得こころえ食物の善悪ぜんあく小児の育方そごのそく 痲瘰まろうの用意ようい懐妊くわいにんの當あたりまで都て懇切けんせつ小書せうしよ甚せうく有益うゑきの書あり

# 養生訣

右同著

此書ハいも行ひ易き養生の方を記し人をして毎病長命まいびやうじやうめいの途みち

# 武雜記補註

伊勢守平貞孝いせのまもりへいさだか主著 裔孫貞丈先生註 長澤伴雄先生補

全

此書ハ伊勢守貞孝いせのまもりへいさだかの抄録せうろくなりしを室町將軍家の儀式諸調むろまちしやうぐん家のぎしきしよてう 度の来由きよゆ且用またもちひ抄録せうろくなりしを裔孫貞丈先生せいのそんさだか細注こまじゆを加へ畫圖えずを 制せい表へいし其形状そのけいじやうを摸もつさし書たり 此度長澤伴雄先生このたびのちやうざいへいさだか善本ぜんぽんを校合けうがふし

て頭書の補注を加へ刊布せしむるハ武家故史要用の重宝也

# 常山紀談

備前湯浅元植先生輯

初輯五冊迄  
全二十五冊

此書ハ常山先生の隨筆にて上應仁文明より下元和寛永の比まで戦國の  
將士鬪争小周旋の事をも主と記して史書を編べた料小せしもの  
遺稿をまじへ事實の正しきものも更におく亂世の光景を伺ひ觀るべき物  
此卷の右小出のたう誠小武家必用の珍書あり

# 雨夜燈

右同作

全一冊

此書ハ當 大將軍家御治世の初より名君良臣の言行の道小叶ひ  
て有難うし事しものもと輯めく治世の龜鑑とせしもの書あり  
此度常山紀談刊行の序小に梓して普く世に施し

# 發行

# 書肆

江戸日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 浅草茅町二丁目	須原屋伊八
同 日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同 全所	小林新兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同 本石町十軒店	英大助
同 下谷車改町	和泉屋庄治郎
京寺町通松原	勝村治右門
備中倉敷	太田屋六藏
大坂心齋橋通安堂寺町	秋田屋太右衛門

